

初期王朝期末期ラガシュの魚についての一考察

Notes on *a-de₂* fish in ED III Lagash

田中裕介
Yusuke TANAKA

Abstract In Lagash, a city in southern Mesopotamia, as many as 2000 administrative documents from the end of the Early Dynastic IIIb period (2500?-2334? BCE) have been unearthed, and these materials are very important for research into the history of ancient Mesopotamia.

One problem encountered in such research, however, is that the meanings of many of the words or phrases appearing in these materials are still not understood. In this paper, I discuss one such term: “*ku₆ a de₂*”

There is no question that “*ku₆*” is “fish,” “*a*” is “water,” and “*de₂*” is “pour,” and that “*ku₆ a de₂*” is a term that means fish, or a fish in a particular state. The question is, specifically what state is it? Given the fact that the word “*a*,” or “water,” is included, “*ku₆ a de₂*” has traditionally been understood as “live fish.” However, there is no other basis for “*ku₆ a de₂*” to mean live fish, and in recent years, doubts have arisen about the validity of this interpretation.

Using this material, I conducted a detailed study into what kind of fish was in fact represented by “*ku₆ a de₂*” The results reveal that “*ku₆ a de₂*” was a fish that could to some extent be preserved, that in all likelihood it was not a live fish, and that it was probably a fermented food, having some connection with salt. In light of these findings, the true form of “*ku₆ a de₂*” may have been *shiokara**. When a fish was caught, sprinkled with salt, and left to sit for some time, moisture would seep out of the fish’s body and it would naturally ferment, becoming *shiokara*. If one thinks of “*de₂*” or “pouring water” as meaning water emerging from the body, fish *shiokara* certainly seems to fit the bill for “*ku₆ a de₂*.”

Until this time, research into fishing in Lagash at the end of the Early Dynasty has been conducted on the premise that “*ku₆ a de₂*” meant “live fish.” If, however, “water pouring fish” was not a live fish but fish *shiokara*, past studies will definitely need to undergo substantial review.

**Shiokara* is a Japanese term that describes a preserve of finely cut fish meat salt-pickled with its entrails and fermented.

Keywords Lagash(ラガシュ), Early Dynastic period(初期王朝期), fish(魚), *ku₆ a de₂*(“水を注ぐ魚”)

はじめに

ティグリス川とユーフラテス川の間位置するメソポタミアは、古くから都市が生まれ、

高度な文明が栄えた地域である。

そのメソポタミアの歴史を考えるうえで無視できないのがラガシュという国である。ラガシュといえば、初期王朝期（前 29 世紀～前 2334 年？）の末期に隣国ウンマとおこなった戦争が有名であろう。この戦争は約 100 年の長きにわたって続いた大戦争で、かつ記録に残された戦争としては世界でも最古級のものであり、非常に興味深い。またラガシュといえば、アッカド期（前 2334 年？～前 2111 年？）の末期に活躍したグデア王も有名である。グデアはアッカド王国衰退後の動乱期にラガシュの全盛期を築き、メソポタミア彫刻の傑作である「グデア像」を残した人物であり、これまた非常に興味深い。ともかくラガシュは、前三千年紀後半のメソポタミアで最も繁栄し、その歴史に大きな影響を与えた国のひとつであった。

このようなラガシュの繁栄は穀物、野菜、畜産物、魚などさまざまな食物によって支えられていたが、その中でも特に注目されるのが魚である。メソポタミアの最南部に位置し、川や海、沼沢地など多くの漁場に囲まれていたラガシュには、他の国より高度な魚食文化があったのではないだろうか。特にラガシュが有力国家として台頭した初期王朝期末期には、それまでより多くの魚が食べられるようになり、魚を調理する技術なども大いに進歩したのではないだろうか。しかしそれについての研究はあまり進んでおらず、内容にもひとつ大きな問題が残っている。そこで本稿は今後のためにこの問題の再検討をおこない、これまでの研究成果をまとめなおすことにする。

I 問題の所在：ラガシュの人々と生魚

先述したように、初期王朝期末期ラガシュの魚食文化についてはあまり研究が進んでいない。主な研究としてはダイメル¹⁾、サロネン²⁾、バウアーやゼルトツ³⁾、プレントイスやベルド⁴⁾のものがあるが、彼らの多くが支持している通説をまとめると下に挙げるようなものしかない。

・漁師が獲っていた魚は全部で 40 種類ほどあった。ただしその多くは何の魚か同定され

1) Deimel 1926 は今となってはさほど役に立たないが、研究史上非常に重要。初期王朝期末期ラガシュの水産業について、はじめて本格的に研究したものである。

2) Salonen 1970 は現在も有用。初期王朝期末期のラガシュだけでなく、古代メソポタミアの水産業全般についての研究であり、その詳しさは他をはるかにしのぐ。

3) Bauer 1972, Selz 1989, Selz 1993 は初期王朝期末期のラガシュについて研究するには汎用的に役立つ。行政経済文書とよばれるさまざまな粘土板史料を翻訳・翻訳し、詳細な注釈を付したものである。本稿で引用した史料の翻訳も、これらを参考にしたところが多い。

4) Prentice 2002, Beld 2002 は最新の研究状況を知るために必須。両者とも初期王朝期末期ラガシュの経済について取りあつかっているが、特に前者は物品の移動、後者は儀礼と経済の関係について詳しい。

ていない⁵⁾。

- ・漁師は定期的に魚を国へ納めていたが、国はその魚を外国との交易品、神への奉納物、市民への配給などに使っていた。
- ・国へ納められる魚には生魚と保存加工された魚があり、保存加工の方法には開き干し、塩漬けなどがあった。

ただ、これらの説の中にも興味深い部分はある。それは、国へ納められる魚に生魚があったという部分である。生魚は腐りやすく取りあつかいが難しいが、いっぽうで加工した魚よりさまざまな調理が可能である。そのような生魚が国へ納められていたのであれば、当時のラガシュではすでに、多様な魚の調理法が確立していたということになるかもしれない。またさらに想像をたくましくすれば、当時のラガシュには生の魚を食べる文化があったかもしれない、などと考えることもできるだろう。

しかし問題は、この通説の信憑性が近年揺らいでいることである。

II 先行研究：水+注ぐ+魚=生魚？

通説によれば、国へ納められた魚の中で「水を注ぐ魚」と呼ばれるものが生魚であるという。

VS 27, 056 (=VAT 04824)

540 匹の水を注ぐ agargara 魚。

海の漁師であるルガルシャラトウクがこれを持ってきた。

ヌバンダ職であるシュブルが、ニンギルス神の大麦を食べる祭りの後に、これを王妃の家を持っていった。1年。

DP 298

30 匹の tar 魚, 4 匹の zubud 魚, 300 匹の開き干しの gir 魚,

360 匹の ubi 魚, 240 匹の ki-mu₁₁魚, 1710 匹の水を注ぐ gir 魚。

これは「テーブルの魚」である⁶⁾。

ナンシェ神の羊に大麦と水を運ぶ月に、

海の漁師であるルガルシャラトウクがこれを持ってきた。

そしてヌバンダ職であるエニガルが王妃の家へこれを納めた(?)。

5) Deimel 1926, Salonen 1970 さらに Civil 1961 で魚の同定がころみられているが、根拠に乏しいためか、一部の魚を除いてそれらは定着していない。また最近では Veldhuis 2004 もあるが、これは魚より鳥の同定を主としたものであり、本稿の議論にはあまり役に立たなかった。このような事情を踏まえて本稿では、特に問題が生じない限り、どの魚も原語(シュメール語)のままあつかうことにする。なお考古学の分野でも魚の同定はあまりすすんでおらず、めぼしい研究は von den Driesch 1981 しかないようである。

6) 「テーブルの魚」は海の漁師が年に5回魚で納める、一種の税である。

ラガシュ王ウルカギナの妻ササ。2年。

たとえばこれは当時の史料の一部を翻訳したものであるが、これらの史料に現れる「水を注ぐ agargara 魚」「水を注ぐ gir 魚」が「水を注ぐ魚」である⁷⁾。また第二の史料では、「開き干しの gir 魚」「水を注ぐ gir 魚」以外の魚は状態説明が省略されており、この中にも実質的には「水を注ぐ魚」であるものが含まれるかもしれない。

ともかく通説では「水を注ぐ魚」が生魚と解釈されてきたのであるが、その根拠となったのは「水を注ぐ魚」という名前そのものである。「水を注ぐ魚」というのは、ダイメルによれば「(誰かが) 水を注ぐ魚」すなわち水を注がれる魚、サロネンなどによれば「(自身で) 水を注ぐ魚」すなわち体から水が出る魚という意味である。しかし彼らは、いずれにせよこれは生魚であろうと解釈したのである⁸⁾。

しかし近年、若手研究者であるプレントイスは下のような事例を取りあげ、このような通説に対して疑問を呈している。

VS 14, 043

120 マナの銅⁹⁾、24 マナの錫、

540 匹の sumaš 魚、180 匹の TA×ŠE 魚、180 匹の水を注ぐ gir 魚、

60 匹の開き干しの agargara 魚、60 匹の開き干しの gir 魚、60 匹の亀(?)。

これを交易のための品として、子牛を父が置く月(?)に、

7) 魚の納入について書かれた史料の中で、「水を注ぐ魚」が現れるものは以下の通りである：BIN 08, 365; DP 278; DP 280; DP 281; DP 282; DP 284; DP 289; DP 291; DP 294; DP 295; DP 297; DP 298; DP 300; DP 304; DP 305; DP 310; DP 312; DP 313; DP 314; DP 317; Nik 1, 265; Nik 1, 268; Nik 1, 272; Nik 1, 274; RTC 031; RTC 035; RTC 036; TSA 48; TSA 50; VS 14, 025; VS 14, 104; VS 14, 134; VS 14, 143; VS 14, 158; VS 14, 174; VS 25, 017; VS 25, 042; VS 25, 050; VS 25, 053; VS 25, 107; VS 27, 020; VS 27, 052; VS 27, 053; VS 27, 056; VS 27, 058; VS 27, 060; VS 27, 090; VS 27, 093。また、「水を注ぐ魚」が現れないものは以下の通りである：Amherst 001; BIN 08, 361; BIN 08, 370; DP 279; DP 283; DP 285; DP 286; DP 287; DP 292; DP 293; DP 296; DP 299; DP 301; DP 302; DP 303; DP 306; DP 308; DP 309; DP 311; DP 315; DP 316; DP 318; DP 319; DP 320; DP 321; DP 322; DP 323; DP 324; DP 325; DP 326; DP 327; DP 328; DP 329; DP 331; DP 333; HSS 03, 044; Nik 1, 266; Nik 1, 269; Nik 1, 271; Nik 1, 276; Nik 1, 277; PSE 1, 2; RTC 030; RTC 032; RTC 033; RTC 034; RTC 037; VS 14, 018; VS 14, 019; VS 14, 024; VS 14, 064; VS 14, 112; VS 14, 132; VS 14, 136; VS 14, 139; VS 14, 142; VS 14, 151; VS 14, 165; VS 14, 166; VS 14, 169; VS 25, 010; VS 25, 016; VS 25, 019; VS 25, 028; VS 25, 035; VS 25, 038; VS 25, 047; VS 25, 052; VS 27, 038; VS 27, 045; VS 27, 051; VS 27, 083。

8) 「水を注ぐ魚」は原語(シュメール語)で $ku_6 a de_2$ という。もしこれが水を注がれる魚であるならば、 $-a$ という文法要素がついて $ku_6 a de_2-a$ になるはずだ、とサロネンやバウアーはいい、ゼルトツもこれにしたがっている [Salonen 1970: 190-191; Bauer 1972: 381; Selz 1989: 367]。しかし当時のラガシュのシュメール語文法はまだ完全に解明されていないため、本稿では「水を注ぐ魚」の意味についてはひとまず保留して議論をすすめることにする。なおダイメルは $ku_6 a de_2$ についての文法的な議論は何もしていない [Deimel 1923: 304]。またベルドは「水を注ぐ魚」の意味についてそもそも言及せず、単に「水を注ぐ魚」を生魚と解釈するにとどめている [Beld 2002: 23]。

9) マナは重さの単位。1 マナは約 0.5 kg である。

大商人である…へ、ラガシュ王ウルカギナの妻ササが、
王宮から与えた。2年。

ここでは180匹の「水を注ぐ gir 魚」が交易品としてあつかわれているが、これが生魚であるとするれば、交易の途中で腐ってしまうのではないかというわけである¹⁰⁾。また振り返ってみれば、「水を注ぐ魚」を生魚と解釈する根拠も非常に曖昧で、決定的なものとはとてみえない。「水を注ぐ魚」が水を注がれる魚であるにせよ、体から水が出る魚であるにせよ、乾燥した魚でないことは確かであろう。しかしそれだけなら生魚でなくとも、たとえば漬けものにした魚でも練りものにした魚でもよいのではないか。

だがそれでは、以上の議論から「水を注ぐ魚」は生魚でないと断言できるのかということ、それも不可能である。プレントイスの取りあげた事例では、「水を注ぐ魚」が大商人に渡されたことは確認できるが、それらがそのまま遠隔地まで運ばれ、交易に使われたということまでは確認できないからである。

はたして「水を注ぐ魚」は生魚なのか、そうでないのか。

Ⅲ 「水を注ぐ魚」の足跡を追う

そこで筆者は史料を用いて、「水を注ぐ魚」が国へ納められた後、何らかの用途に使われるまでにどのように取りあつかわれていたか調査した。もし本当に「水を注ぐ魚」が生魚であれば、早々に用途が決められ処理されていたはずであるが、そのような事実が確認できるだろうか。調査の結果は以下の通りである。

1 「水を注ぐ魚」が納められた後、しばらく放置される事例

VS 27, 090 (=VAT 04887)

16 グンの ubi 魚¹¹⁾、4 グンの ki-mu₁₁魚、840 匹の [水を注ぐ gir 魚]。

これは「テーブルの魚」である。

ニンギルス神の羊に [大麦と水を] 運ぶ月に、

漁師である [ネサグが] これを持ってきた。4年。

RTC 031

5 匹の tar 魚、2 グンの gur₁₀魚、4 グンの ubi 魚、420 匹の水を注ぐ gir 魚。

[サンガの家の漁師であるルガルピリグ (が以上を持ってきた)]。

16 グンの ubi 魚、4 グンの ki-mu₁₁魚、840 匹の水を注ぐ gir 魚。

10) ただしプレントイスは従来の解釈を完全には否定せず、「水を注ぐ魚」を「水を出す魚=生魚(?)」と訳している [Prentice 2002: 150]。

11) グンは重さの単位。1 グンは約 30 kg である。魚は数で数えられることが多かったが、重さで量られる場合もあった。

[王妃の] 家の漁師であるネサグ (が以上を持ってきた)。

[これは「テーブルの魚」であり],

海の漁師たちが、ニンギルス神の羊に大麦と水を運ぶ月に持ってきたものである。

ヌバンダ職であるエニガルがこれを保管庫へ持っていった。4年。

これら二つの史料は同じ年の同じ月に書かれたものであり、内容もつながっている。すなわち、前者にはネサグという漁師が魚を納めたことが書かれており、後者にはその魚が他の魚と一緒に保管庫へ移されたことが書かれている。つまり国はネサグから魚を受け取った後、他の漁師が魚を持って来るのをしばらく待ってからそれを保管庫に移したのであり、その間ネサグの魚は行き先が決まらないまま放置されていたのであるが、重要なのはその中に「水を注ぐ gir 魚」が含まれていたことである。もし「水を注ぐ gir 魚」が生魚であるとしたら、保管庫に移される頃には腐ってしまっていたのではないか。

2 「水を注ぐ魚」が使われる前に、いったん保管庫に置かれる事例

VS 14, 025

10 匹の tar 魚, 180 匹の gur₁₀魚, 180 匹の ki-mu₁₁魚,

840 匹の ubi 魚, 2580 匹の水を注ぐ gir 魚, 120 匹の esir_x魚,

39 匹の KA-lu-ub₂魚, 25 匹の su-su する geštu 魚¹²⁾。

ネサグ (が以上を持ってきた)。

5 匹の tar 魚, 240 匹の ki-mu₁₁魚, 720 匹の ubi 魚, 1380 匹の gir 魚。

ルガルシャラトウク (が以上を持ってきた)。

180 匹の gur₁₀魚, 120 匹の ki-mu₁₁魚, 420 匹の gir 魚。

ガラトゥル (が以上を持ってきた)。

彼らは海の漁師たちである。これは「テーブルの魚」である。

120 匹の ki-mu₁₁魚, 50 匹の開き干しの suhur 魚, 134 頭の si-U-NU。

汽水の漁師であるルガルメガルガル (が持ってきた)。

合計 15 匹 tar 魚, 360 匹の gur₁₀魚, 660 匹の ki-mu₁₁魚,

1560 匹の ubi 魚, 4380 匹の水を注ぐ gir 魚, 120 匹の esir_x魚,

39 匹の KA-lu-ub₂魚, 25 匹の su-su する geštu 魚,

50 匹の開き干しの suhur 魚, 134 頭の si-U-NU。

これは「テーブルの魚」である。

ナンシェ神の gu₄-ra₂-bi₂-mu₂-a の月に、海の漁師たちがこれを持ってきた。

そしてヌバンダ職であるエニガルがこれを保管庫に持っていった。

12) サロネンが su-su を「燻製にした」と訳すが、その根拠は不明である [Salonen 1970: 259]。またアッシリア学の百科事典である RIA では su-su が「皮を剥いだ」「切り身にした」と訳されているが、この根拠も不明である [RIA 3: 69]。

ラガシユの支配者ルガルアンダの妻バラナムタルラ。5年。

Nik 1, 266

1560 匹の品質の良い gir 魚。

その gab₂-il₂籠は 4 つ。その pisan 籠は 1 つ。

120 匹の esir₃魚, 39 匹の KA-lu-ub₂魚, 25 匹の su-su する geštu 魚。

その pisan 籠は 1 つ。

これは「テーブルの魚」である。

gu₄-ra₂-bi₂-mu₂-a の月に、海の漁師たちがこれを持ってきた。

そしてヌバンダ職であるエニガルが、アバサにこれを与えた。

彼はギルガメシュの離れ家のところに建てられた家に、これを持っていった。5年。

さきほどと同様に、これら二つの史料も同じ年の同じ月に書かれたもので、内容がつながっている。すなわち、前者には漁師たちの納めた魚が保管庫へ移されたことが書かれており、後者にはその魚の一部がアバサという人物に渡されたことが書かれている。つまりこのアバサに渡された魚は、その前は保管庫に置かれていたのであるが、注目すべきはその中に「品質の良い gir 魚」が含まれていたことである。二つの史料を見比べるとわかるが、「品質の良い gir 魚」は「水を注ぐ gir 魚」の一部である。さきほどの事例と同様に、もし「水を注ぐ gir 魚」が生魚であるとしたら、アバサに渡される頃には腐ってしまっていたのではないか。

ここで取りあげたのは最もわかりやすい二つの事例であるが、同様の事例は他にも多くあり、一般的に「水を注ぐ魚」が急いで取りあつかわれていた形跡は見られなかった。ここから判断する限り、どうやら「水を注ぐ魚」は生魚ではないようである。

IV 「水を注ぐ魚」の特徴を探る

しかし、それならば「水を注ぐ魚」はどのような魚なのか。筆者はふたたび史料を用いて、今度は「水を注ぐ魚」の特徴を抽出してみた。

1 「水を注ぐ魚」の代用品として「塩漬けの魚」が使われることがある

Amherst 001

10 匹の tar 魚, 540 匹の gur₁₀魚, 180 匹の開き干しの gir 魚,

1560 匹の ubi 魚, 540 匹の開き干しの geštu 魚, 360 匹の塩漬けの gir 魚,

180 匹の塩漬けの agargara 魚。

ネサグ (が以上を持ってきた)。

10 匹の tar 魚, 5 匹の zubud 魚, 5 匹の geš-dub₂-dub₂魚,

300 匹の gur₁₀魚, 1800 匹の開き干しの gir 魚, 1080 匹の開き干しの agargara 魚,

1740 匹の ubi 魚, 660 匹の塩漬けの gir 魚, 480 匹の塩漬けの agargara 魚,
1980 匹の sumaš 魚。

ルガルシャラトウク (が以上を持ってきた)。

300 匹の gur₁₀魚, 120 匹の開き干しの gir 魚, 480 匹の ubi 魚,

360 匹の塩漬けの gir 魚, 120 匹の塩漬けの agargara 魚。

アマルナムヌン (が以上を持ってきた)。

10 匹の tar 魚, 5 匹の zubud 魚, 360 匹の gur₁₀魚,

360 匹の ubi 魚, 60 匹の開き干しの gir 魚, 180 匹の塩漬けの gir 魚,

120 匹の塩漬けの agargara 魚, 120 匹の塩漬けの TA×ŠE 魚,

600 匹の suhur 魚。

ガラトウル (が以上を持ってきた)。

60 匹の gur₁₀魚, 420 匹の ubi 魚, 360 匹の塩漬けの agargara 魚。

サグギギルバ (が以上を持ってきた)。

これは「IL₂の魚」である¹³⁾。

ナンシェ神の麦芽を食べる祭りの月にこれを持ってきた。4 年。

王妃の家の書記エニガル。

ナンシェ神のところへ (?). 海の漁師たち。

この史料では、漁師の持ってきた魚の中に「水を注ぐ魚」がまったく現れず、代わりに「塩漬けの魚」が現れる。このような例は他にもいくつかみられるが [DP 279; DP 293; DP 299; DP 301; DP 311; DP 320; DP 333; TSA 48; TSA 50; VS 14, 024; VS 25, 017], そのほとんどはウルカギナ王 2 年以降, すなわちラガシュとウンマの戦争が激化し, 魚の取立ても厳しくなっていく時期のものである。したがってこれらの「塩漬けの魚」は, 「水を注ぐ魚」がなくなってしまった時に, 漁師が自宅から持ち出して納めた代用品と考えられる。

2 「水を注ぐ魚」の一部は魚醤を作るのに使われる

DP 307

1200 匹の水を注ぐ gir 魚, 600 匹の水を注ぐ agargara 魚。

穀物の山を積み上げる (?) 月に,

臭い魚を作るため, 料理人であるアマルギリへ,

ヌバンダ職であるエニガルがこれを与えた。

この魚はバウ神の所有物である。

ラガシュ王ウルカギナの妻ササ。4 年。

この史料では二種類の「水を注ぐ魚」が「臭い魚」を作るのに使われている。この「臭い

13) 「IL₂の魚」は海の漁師が特定の祭りの時に魚で納める, 一種の税である。

魚」はかつては詳細不明とされてきたが¹⁴⁾、他の史料ではビールなどと同じ液体としてあつかわれており、間違いなく魚醬である [VS 25, 013; VS 25, 031; VS 25, 075; VS 27, 026]¹⁵⁾。このように「水を注ぐ魚」が魚醬を作るのに使われている例は他にもみられるが [DP 304; VS 27, 053; VS 27, 093]、いっぽうで「開き干しの魚」や「塩漬けの魚」が魚醬を作るのに使われている例はみられない。なお一般的に魚醬は魚を塩漬けにし、発酵させて作るものである。

3 「水を注ぐ魚」はまれに品質の悪いものができることもある

VS 14, 165

5 匹の zubud 魚, 2040 匹の ubi 魚, 2400 匹の品質の良い gir 魚,
420 匹の二級品の gir 魚, 60 匹の esir_x 魚, 40 匹の geštu 魚。
以上は「テーブルの魚」である。

120 匹の ubi 魚, 60 匹の ki-mu₁₁ 魚, 120 匹の開き干しの geštu 魚,
1800 匹の gir 魚。

以上は不足分の埋め合わせ (?) である。

これは「テーブルの魚」である。

羊毛を支給する月に、海の漁師であるネサグがこれを持ってきた。

そしてヌバング職であるエニガルが、

これを王妃の家の木の小屋 (?) に持っていった。5 年。

この史料に現れる「二級品の～」は「品質の良い～」と対になる表現であるが、この「二級品の」という表現が使われる魚は、この史料に現れる gir 魚の他には agargara 魚だけである [VS 25, 016]。そしてこの gir 魚と agargara 魚はともに「水を注ぐ魚」になることが多い魚である。したがって「水を注ぐ魚」は、まれに品質の悪いものができることもあったのだと考えられる。

4 「水を注ぐ魚」は、淡水の漁師が納める場合は「sa ZI.ZI-ŠE₃の魚」になる

当時のラガシュには海で漁をする海の漁師、川や耕地の水路などの淡水域で漁をする淡水の漁師という二種類の漁師がいたが、「水を注ぐ魚」を納めていたのはそのうちの前者だけである¹⁶⁾。

VS 27, 052 (=VAT 04812)

…匹の…魚, 60 匹の開き干しの ubi 魚, 120 匹の開き干しの agargara 魚,

14) 「臭い魚」は原語で ku₆ hab₂ というが、かつては ku₆ gigr₂ と翻字され「戦車の魚 (?)」と訳されてきた [Beld 2002: 23]。

15) なお先行研究でもプレントイスはこれを魚醬と訳している [Prentice 2002: 150]。

16) 前掲注 7 を参照。

300 匹の水を注ぐ agargara 魚, 60 匹の水を注ぐ gir 魚。

これはニンギルス神の羊に大麦と水を運ぶ月に、

海の漁師であるルガルピリグが持ってきた、「テーブルの魚」である。

[ヌバンダ職であるエニガルが] これを王妃の家に保管庫に持っていった。

[ラガシュの支配者ルガルアンダの妻] バラナムタルラ。…

RTC 037

2 グンの開き干しの a-dar-tun₂魚, 5 つの sa ZI.ZI-ŠE₃の agargara 魚¹⁷⁾。

淡水の漁師であるウドゥが, 羊毛を支給する月にこれを持ってきた。

そして [ヌバンダ職である] エニガルがこれを [保管庫] に持っていった。

ラガシュの支配者ルガルアンダの妻バラナムタルラ。4 年。

ここで注目すべき点は、海の漁師と淡水の漁師の双方が獲っていた魚でも、海の漁師だけがそれを「水を注ぐ魚」として納めることがあった、というところである。たとえば上の史料では、海の漁師のルガルピリグが agargara 魚を「開き干しの魚」および「水を注ぐ魚」として納めているいっぽうで、淡水の漁師のウドゥはそれを「sa ZI.ZI-ŠE₃の魚」として納めている。

DP 327

8 つの sa ZI.ZI-ŠE₃の eštub 魚, 3 つの sa ZI.ZI-ŠE₃の小さな suhur 魚,

35 の sa ZI.ZI-ŠE₃の agargara 魚, 6 つの sa ZI.ZI-ŠE₃の gamar 魚,

1 つの sa ZI.ZI-ŠE₃の gam-gam 魚。

これは淡水の魚である。

リシ神の祭りの月に、漁師であるウドゥがこれを持ってきた。

そしてヌバンダ職であるエニガルがこれを保管庫に持っていった。

ラガシュ王ウルカギナの妻ササ。2 年。

DP330

249 の sa ZI.ZI-a の魚。

ki-sal₄-la の家からこれを持っていった。

…の sa ZI.ZI-a の魚。

王妃の家からこれを持っていった。

そしてヌバンダ職であるエニガルが、果樹園の保管庫で臭い魚を作った。3 年。

(この粘土板は) 写しである。

またこの「sa ZI.ZI-ŠE₃の魚」であるが、興味深いのは、そのほとんどが淡水の漁師によって納められたものであること [DP 322; DP 323; DP 325; DP 326; DP 327; DP 329; DP 330;

17) sa ZI.ZI-ŠE₃は ZI.ZI-ŠE₃という植物から作られた一種の網であり、sa ZI.ZI-a と表記されることもある。

DP 331; Nik 1, 277; PSE 1, 2; RTC 037; VS 14, 018; VS 14, 019; VS 14, 132; VS 14, 136; VS 14, 139; VS 25, 028; VS 27, 038; VS 27, 051; VS 27, 066], そして「水を注ぐ魚」と同様に魚醬にされていたことである [DP 322; DP 329; DP330; PSE 1, 2]。どうやら「水を注ぐ魚」と「sa ZI.ZI-ŠE₃の魚」は似たような状態の魚であるが、前者は海から運んでくるのに適したものであり、後者は川や耕地の水路から運んでくるのに適したものである、ということらしい。

V 「水を注ぐ魚」の正体

以上の特徴から推測される「水を注ぐ魚」の正体、それは魚の塩辛である。獲った魚に塩をまぶしてしばらく置いておくと、魚から水分がしみ出すとともに、自然に発酵が進んで塩辛になり、そのまま発酵を進めれば、魚全体が液化して魚醬になる。このことから魚の塩辛は「水を注ぐ魚」、すなわち体から水が出る魚であり、かつ魚醬を作るのに使われるという第二の特徴を備えているといえる。そして発酵によって作られる塩辛は、場合によっては多少失敗したものになりうるから、第三の特徴も備えているといえる。さらに「塩漬けの魚」を水分が少なく発酵も進んでいない、いわば塩干魚と考えれば、長期保存に適し備蓄用として使われる「塩漬けの魚」に対して、「水を注ぐ魚」は日常的に使われるものということになり、第一の特徴も備えることになる。

また第四の特徴についてであるが、淡水の漁師がまったく「水を注ぐ魚」を納めていなかったのは、彼らが塩辛にした魚ではなく、塩辛にしている途中の魚を納めていたからと考えれば辻褄が合う。塩辛にしている途中の魚とは、塩をまぶして sa ZI.ZI-ŠE₃ という網に小分けにした魚、すなわち「sa ZI.ZI-ŠE₃の魚」である。これに対して海の漁師は海という遠隔地で漁をしており、魚を納めに行くのにも時間がかかったため、納められた魚はすでに完成した塩辛、すなわち「水を注ぐ魚」になっていたというわけである。

もし「水を注ぐ魚」が塩辛だとすれば、漁師は魚を納めるにあたって大量の塩を使っていたことになる。しかしペルシア湾に面していたラガシュでは、それは難しいことではなかっただろう。実際にいくつかの史料では、漁師が各種の魚とともに、塩を国へ納めていたことが書かれている。

VS 14, 143

240 匹の ki-mu₁₁魚, 60 匹の水を注ぐ gir 魚,

1つと半分の gurdub 籠の魚の塩。

ガラトゥル (が以上を持ってきた)。

60 匹の ubi 魚, 180 匹の ki-mu₁₁魚。

アマルナムヌン (が以上を持ってきた)。

彼らは海岸 (の漁師である(?))。

これは「テーブルの魚」である。

ニンギルス神の羊に大麦と水を運ぶ月にこれを持ってきた。

そしてエニガルが e₂-ur₃-ra にこれを持っていった。6年。

この史料に限らず、漁師が納めていた塩はすべて「魚の塩¹⁸⁾」と呼ばれている [DP 285; DP 291; RTC 034; VS 14,166; VS 14,174]。「魚の塩」とは魚に使う、または魚に使った塩ということであろうから、漁師にとってそれだけ塩は魚と深く結びついたものであったのだろう。

もちろんこれだけの議論で、「水を注ぐ魚」が魚の塩辛であるという推測が立証されたとはいえない。しかし「水を注ぐ魚」を明確な根拠のないまま生魚としてきた通説に比べれば、この推測は多少なりとも説得力があり、検討に値するものといえるのではないだろうか。

VI 結 論

I章で見たように、初期王朝期末期のラガシュで国へ納められる魚には生魚があった、というのがこれまでの通説であった。しかし本稿で再検討した結果、これは誤りではないか、生魚と解釈されてきた「水を注ぐ魚」は実は魚の塩辛であり、国へ納められる魚は保存加工されたものばかりだったのではないか、ということになった。

国へ納められる魚が保存加工されたものばかりだったとすれば、当時のラガシュの魚食文化は、生魚を日常的にあつかうほどの水準には達していなかったということになる。これは通説に比べるといささか地味であり、面白みに欠ける結論である。だがそのいっぽうで、「水を注ぐ魚」が塩辛であったとすれば、漁師たちは魚を塩で保存する時に「水を注ぐ魚」「塩漬けの魚」といった、いくつかの方法を使い分けていたということになるし、「水を注ぐ魚」は塩が豊富なラガシュならではの加工品だったかもしれないということにもなるから、これはこれで興味深いのではないか。

また、本稿を足掛かりとしてより詳細な研究を続けていけば、魚の加工や利用方法、水産技術などについて新たな事実を発見できるかもしれない。残念ながら現在のところは「水を注ぐ魚」の正体が完全に解明されたとはいえない。しかし本稿が多く読者の関心をひき、さらなる研究の進展をもたらすきっかけとなるのであれば、ひとまず筆者のこころみは成功したということができるだろう。

18) バウアーやサロネンはこれを一種の魚としているが、常に籠の数で数えられているため、明らかに魚ではない [Salonen 1970: 214; Bauer 1972: 395]。

おわりに

初期王朝期末期のラガシュについての研究は、すでに約1世紀の歴史があり、全体としては蓄積も膨大である。しかしその内実を詳細に見てみれば、研究が盛んにおこなわれてきた分野と、そうでない分野の差が非常に大きい。その中で今回筆者は、どちらかといえば後者に属する問題を取りあつかい、一応の議論をすることができた。今後も筆者はこのように、従来あまり研究されてこなかった分野の問題を取りあつかい、初期王朝期末期のラガシュの全体像を明らかにするために、わずかながらも貢献できればと考えている。

参考文献

- Amherst : Pinches, T. G., *The Amherst Tablets, I: Texts of the Period Extending to and Including the Reign of Būr-Sin*. London, 1908.
- BIN 08 : Hackman, G. G., *Sumerian and Akkadian Administrative Texts: From Predynastic Times to the End of the Akkad Dynasty. Babylonian Inscriptions in the Collection of James B. Nies*, vol. 8. New Haven, 1958.
- DP : de la Fuÿe, Allotte, *Documents présargoniques*. Paris, 1908-1920.
- HSS 03 : Hussey, M. I., *Sumerian Tablets of the Harvard Semitic Museum, Part 1. Harvard Semitic series, Vol. III*. Cambridge, Mass, 1912-1915.
- Nik 1 : Nikol'skij, M. V., *Drevnosti Vostocnyja*. St. Petersburg, 1908.
- PSE 1 : Riftin, A. P., *Die altsumerischen Wirtschaftstexte. Publications de la Société Égyptologique à l'Université de l'État de Leningrad* 1. Leningrad, 1929.
- RIA : Ebeling, E. / Meißner, B. / Weidner, E. / Soden, W. Edzard, D. O., *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*. Berlin, 1932 ff.
- RTC : Thureau-Dangin, F., *Recueil des tablettes chaldéennes*. Paris, 1903.
- TSA : de Genouillac, H., *Tablettes sumeriennes archaïques*. Paris, 1909.
- VAT : Vorderasiatische Abteilung. Tontafeln : Tablets in the collections of the Staatliche Museen, Berlin.
- VS 14 : Förtsch, W., *Altbabylonische Wirtschaftstexte aus der Zeit Lugalanda's und Urukagina's. Vorderasiatische Schriftdenkmäler der Königlichen Museen zu Berlin*, Heft 14, 1. Hälfte. Leipzig, 1916.
- VS 25 : Marzahn, J., *Altsumerische Verwaltungstexte aus Girsu / Lagaš. Vorderasiatische Schriftdenkmäler der Staatlichen Museen zu Berlin*, Heft 25. Mainz, 1991.
- VS 27 : Marzahn, J., *Altsumerische Verwaltungstexte und ein Brief aus Girsu/Lagaš. Vorderasiatische Schriftdenkmäler der Staatlichen Museen zu Berlin*, Heft 27. Mainz, 1996.
- Bauer, J. (1972) *Altsumerischewirtschaftstexte aus Lagash*. Berlin.

- Beld, S. G. (2002) *The Queen of Lagash : Ritual Economy in a Sumerian State*, PhD Diss., Univ. of Michigan.
- Civil, M. (1961) The home of the fish : A new Sumerian literary composition. *Iraq* 23, Cambridge, 134-175.
- Deimel, P. A. (1923) Sumerische grammatik Der Archaistischen Texte. *Orientalia* 9/13, Rome.
- Deimel, P. A. (1926) Fisch-Texte der Zeit Urukaginas. *Orientalia* 21, Rome, 40-83.
- Prentice, R. (2002) *The Exchange of Goods and Services in Pre-Sargonic Lagash*, PhD Diss., Univ. of Oxford.
- Salonen, A. (1970) *Die Fischerei im Alten Mesopotamien nach sumerisch-akkadischen Quellen*. Helsinki.
- Selz, G. (1989) *Altsumerische Verwaltungstexte aus Lagaš : Die altsumerischen Wirtschaftsurkunden der Ermitage zu Leningrad*. *Freiburger Altorientalische Studien* 15/1. Stuttgart.
- Selz, G. (1993) *Altsumerische Verwaltungstexte aus Lagaš : Die altsumerischen Wirtschaftsurkunden aus amerikanischen Sammlungen*. *Freiburger Altorientalische Studien* 15/2. Stuttgart.
- Veldhuis, N. (2004) *Religion, Literature and Scholarship : The Sumerian Composition Nanše and the Birds*. *Cuneiform Monographs* 22. Leiden.
- von den Driesch, A. (1981) Fischknochen. *Isin-Išan Bahriyat : Die Ergebnisse der Ausgrabungen 1975-1978* II, ed. Hrouda, B. Munich, 157-167.

(本会会員)